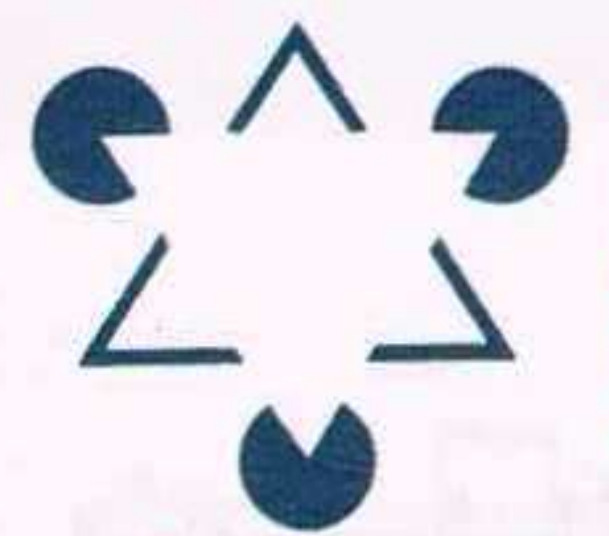


ラッシュは今年、デビュー20周年目を迎える。昨年、それに先立ってリリースされた通算19枚目のアルバム『COUNTERPARTS』でも、作品毎に何か新しいことをしでかしてくれるという姿勢は変わっていない。隙のない洗練された音作りが身上でもあり、それが一貫してバンドのイメージでもあった訳だが、新作ではこれまで影を潜めていた3人のプリミティブな部分が一気に全面に出て、そのイキの良さに驚かされたものだ。

1月から始まったツアーでは、新作からの「DOUBLE AGENT」でステージ前方の左右から炎が上がってショウが始まり、ニール・パートのドラム・ソロと「TOM SAWYER」を花火で締め括るという派手な演出に度肝を抜かれる。また、今までになくアレックス・ライフソンのバック・ヴォーカルやMCがフィーチャされ、いつもの心地好い緊張感の中に、笑わせてくれる瞬間があるのも彼らにしては新しい一面。そしてインストの「LEAVE THAT THING ALONE」や、「HEMISPHERES」からの「THE TREES」「PRELUDE」での3人はまさに水を得た魚で、縦横無尽に弾きまくり叩きまくる彼らに、すっかり目と耳を奪われてしまった。

カリフォルニアの州都の割に地味なことこの上ないサクラメントの、アルコ・アリーナ。ショウを3時間後に控え、40歳になってもキュートなアレックスが楽屋脇の練習室に現れた。おおらかな人柄が滲み出るような柔らかい声で、彼は質問の1つ1つに丁寧に答えてくれた。



アルバムでは殆どのギターをアンプ直で録った

Q:『COUNTERPARTS』でのダイレクトなサウンド作りは、多くの人たちに“ラッシュが若返った”“昔のラッシュに戻った”という印象を与えているようです。これはあらかじめ目標として設定されていたものなのですか？

A:そう。前回のツアー中に話し合っていたんだ。音楽という観点から見て、周りで起こっていることに僕たちは刺激を覚えている。2、3年前になるけど、パール・ジャムやニルヴァーナなどのバンドが出てきて、シアトル勢が活気づいてきた頃だった。ここへ来てようやくミュージシャンの演奏自体に重きが置かれるようになり、曲作り等は別としても、とにかくその演奏スタイルはとてつもなくピュアだと思ったんだ。だからこれからが楽しみだと思ったよ。それが僕たちに“3ピースである”という、バンドの最も好きなところを再認識させることになったと思う。これがそもそもの始まりであり、最終的に僕らの行き着いたところでもあった。だからそのツアー中に、もっとベーシックなアプローチにして3ピースというバンドの一面を発展させようと決めたんだ。

スタジオに一旦入ったら、そういうスタイルを持ったエンジニアをしっかりと据えて、プロデューサーのピーター・コリンズと共に、今回のアルバムの曲作りやサウンド面に於いて、自分たちの目指す方向を話し合った。ピーターはそれに賛成してくれて、僕たちの演りたいことを完全に理解してくれたよ。という訳で、今回僕たちにはとてもはっきりしたプランがあって、



pic: Kazuko Satake

ALEX LIFESON

r u s h

**よりベーシックなアプローチ
での“3ピース”の可能性を
追究した『COUNTERPARTS』
を放ち、デビュー20周年目を
迎えるラッシュの現在**

インタビュー&文●佐武加寿子 Kazuko Satake
協力●森田純一 Junichi Morita

それをやり通したんだ。最初に自分たちでこのプランの中で設定したゴールは、すべて達成できたものと思っているよ。

Q:アルバムの制作にあたっては、3人で時間を掛けてじっくり話し合うと聞いていますが、その一方でスポンティニアスさというものも必要になってくると思います。そのあたりはどうバランスを取っているのですか？

A:僕たちにはそれがとても難しいところなんだ。ラッシュはあまりスポンティニアスを活かすバンドではないからね。何もかもがきちんと前もって準備されていなければならない、それが僕たちの在り方なんだ。特にステージではそうだね。毎晩、ショウではインプロヴァイズするスペース……自由に使える部屋のようなスペースも作っているけど、ステージ全体という家の中ではこれはほんの小さな窓くらいでしかないからね。僕たちはどちらかと言うと、準備万端で総てが作用するべく作用するという安心感を求める方なんだ。

Q:改めてお聞きしますが、ラッシュでの曲作りというのはどのように進行していくものなのですか？ ニールの書いた歌詞に基づいて、実際にはどうやって曲のアイデアを組み合わせていくのですか？

A:大抵は、ニールから歌詞をもらってゲディ（・リー/voc）と僕とでそれに目を通して。だけど、時には曲を作り始めた後に、「この歌詞じゃこの曲には合わない」と分かってその歌詞を見送り、曲の方が進行していったところで他の歌詞に目を移して、それが当てはまるかどうか検討してみたりする。だからいろんな点で、以前ほどは（同じ1曲の中では）必ずしも歌詞がメロディーより先に出来る訳ではなくなった。でもみんなでアイデアを出し合って、それを形にしていってテープに録り、またこれを聴き返してみても少し先に進めていって……という具合だね。

Q:自分ひとりのアイデアは自宅でDATなどに録っておくのですか？

A:そうだね。家のスタジオにアレシスのADATシステムがあって、16チャンネルのデジタル・レコーディングが出来るんだ。だから、何か

アイデアが浮かぶとそこでDATに録って、それを聴きながらみんなで話し合っていくこともある。僕たちが曲を作る時、例えばアルバム最後の曲（「EVERYDAY GLORY」）はSTEINBERGのCUBASE AUDIO（シーケンスソフト……MIDI/デジタル・オーディオ・レコーディング&編集システム）を使って、マッキントッシュで録ったんだ。僕たちは全部4トラックでデジタル録音してからまとめ上げてそれをADATに変換し、そこからレコーディング・スタジオの24トラックの機材に掛けて、ニールがスタジオ全体を使ってドラム・パートを入れられるようにしたんだよ。

Q:アルバムで使用した機材は、基本的には今のツアーで使っているものと同じですか？

A:そうだね。実のところ、アルバムでは殆どのギターをアンプから直で録音したんだ。エフェクトが欲しい時は、僕の手持ちのものを使っただけで、今回はとにかく最小限に止めた。ディレイやリヴァーブも多少は掛けたけど、ハーモナイザーやコーラスなんかは殆ど使っていないよ。

Q:ギターに関してはどうですか？

A:今もポール・リード・スミスを使っている。スタジオではレスポールも使うし、使い込んだフェンダー

のテレキャスターもあるよ。

Q: テレキャスターはどこか手を加えていますか?

A: いや、だいたい前にブリッジをプラス製のものに変えたのと、ネックのニスに剥がしてしまっただけだ。

Q: バンドとしてではなく、個人としてはエフェクトの強いギターとナチュラルなサウンドのギター、どちらが好みですか?

A: エフェクトの方が好きだって言うべきかな。エフェクトが使えるようになって以来ワウ・ペダルからずっと、僕が追究してきたものだからね。でも、エフェクトを通すとサウンド・クオリティーが失われてしまうという事も確かなんだ。

Q: アンプに関しても聞かせてください。今回はギャリエン・クルーガーは使いましたか?

A: いや、今回は全く使っていない。主にピーヴィーの5150とマーシャルを使ったよ。ピーヴィーだとオーヴァードライブがかなりハードに掛かるんだ。マーシャルにはもっと膨らみがあるというか、音に豊かさが出る。この2つが合わさると、良い音が出せるんだ。

Q: ところで、10年前の本誌のインタビューで「アルバムごとにメインで使うギターは変わる」と語っていたようですが、その理論はまだ通っているのですか?

A: そうでもないかな…。『COUNTERPARTS』の前の2作はポール・リード・スミスのシグネチャー・モデルを使っていたし、『POWER WINDOWS』か、もしくは『HOLD YOUR FIRE』ではアクティブ・ピックアップの音が欲しかった時もあった。そして今回のアルバムでは、もっと厚みのあるサウンドに立ち返りたかった。アルバム3〜4作ごとにサウンドの様相が変わり、それに伴ってギターやアンプも確かに変わってきたかもしれないね。ギャリエン・クルーガーを使っていた数年間、とても上手くいったんだけど、今はまた少し違うものが欲しかったということだね。

Q: かつて使用したギターは、今もしっかり保管していますか?

A: チャリティーにだいたい寄付しているんだ。だから、たぶん今は30〜40本くらいだと思う。

**ギターは速弾きだけでは
ないことを、3ピース・バンドをやることから学んだ**

Q: では、以下に挙げるギタリストについて、一言ずつコメントをいただけますか? まずは、ジミー・ヘンドリックス。

A: 彼はブリリアントだよ。今でも彼のプレイを聴くと、他の誰のものでもないオリジナリティーを感じる。沢山の人がカヴァーしてきたけど、今日でもファーストの『ARE YOU EXPERIENCED』を聴けば、新鮮に聴こえるんだ。まったく天才だよ。

Q: では、エリック・クラプトン?

A: 彼は長い間、数奇な人生を送ってきている。浮き沈みも多かった。それがギターにも反映されていると思う。ギターを弾き始めた頃の僕は、確かに彼から大きな影響を受けていたよ。クリームというより、彼のギターのスタイルからね。その頃彼はまだ、ヤードバーズにいたから。でも'70年代初めになると、それほど大きな影響は受けなくなった。彼のスタイルも変遷を辿ってきて、音楽にうるさい様々なファンにも受けることにかけては僕たちよりももっと熟達している。もちろん彼のことは尊敬してやまないよ。

Q: 次はジミー・ペイジ。

A: ジミー・ペイジはすべてのギタリストの中で一番大きな影響を与えてくれた。レッド・ツェッペリンは大好きだったし、特にスタイルから言ってもジミー・

ペイジの弾き方は僕がずっと弾きたいと思っていたものだった。アルバムを聴くと、言葉では言い表せないようなサウンドが頭の中で鳴っていて、突然ギターが物凄いパワーを持って多くのことを語り掛け、感動させるんだ。彼のギターは大好きだったよ。

Q: デイヴィッド・カヴァーデイルとの『COVER-DALE・PAGE』はどう思いましたか?

A: 2、3曲聴いた限りではグレートだったし、それはレッド・ツェッペリンを思わせるものだった。実際そのように意図されたみたいだね。ギター・プレイに関して言えば、レッド・ツェッペリン以来彼がやってきた中では最高の出来だと思う。

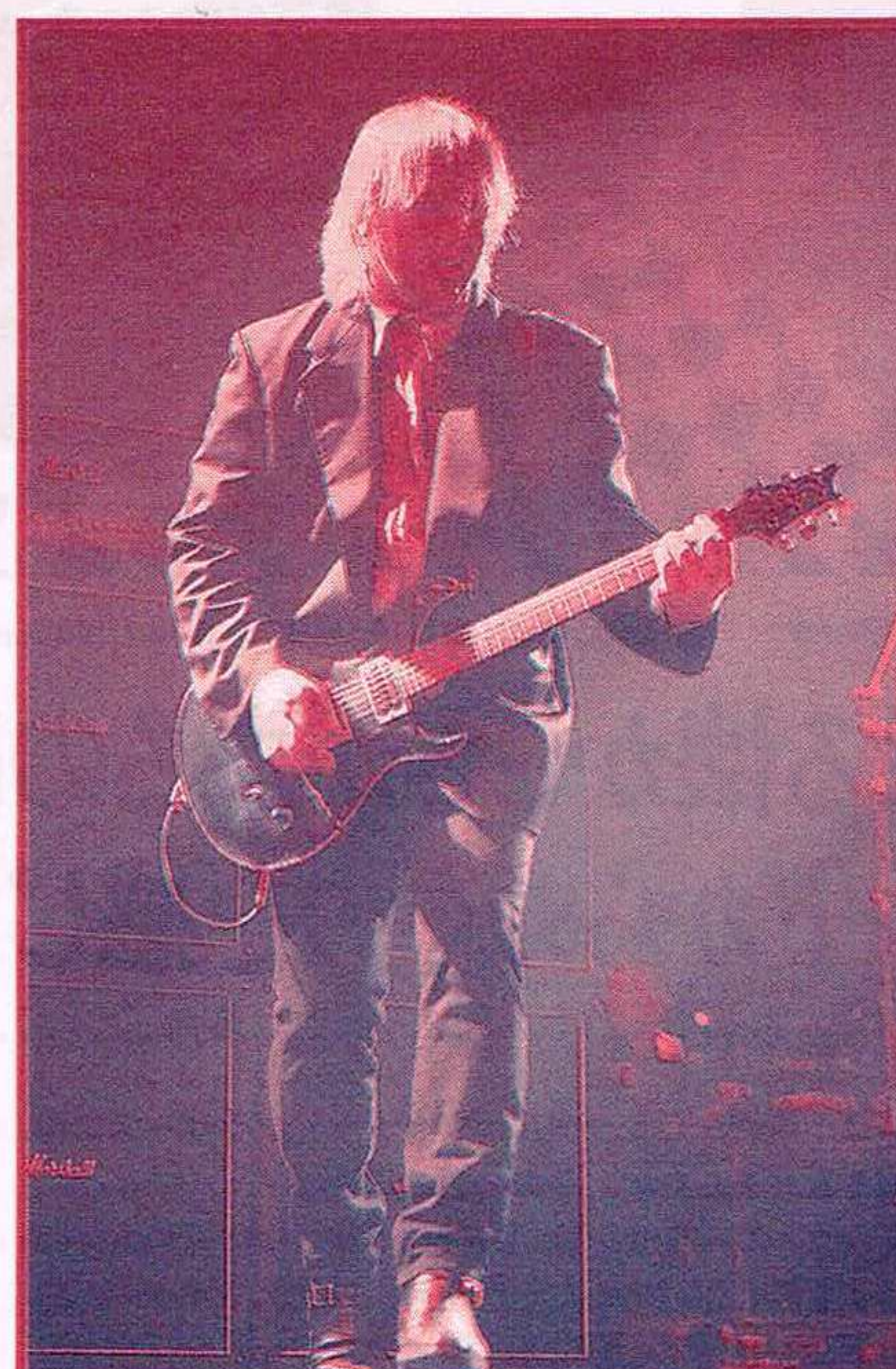
Q: アラン・ホールズワースはどうですか?

A: 彼の影響も大きかった。また別の時期だけだね。

Q: 大いに影響を受けた人が沢山いるんですね。

A: そうなんだ! 誰にでも影響されちゃって(笑)。誰かの演奏を聴いて、必ずしもそういう風に弾きたいとは思わないけど、彼らがいかにして自分たちの演奏から人々の感情を引き出しているかを聴き取れる。アラン・ホールズワースのスタイルには僕も学びたいと思う何か特別なものがあつたんだ。この6〜8年は会ってないけど、ああいったフュージョン寄りのプレイヤーの中で、彼は究極だと思う。彼もやっぱり天才だよ。ギターに光り輝くものがある。

Q: ポール・ギルバートについては?



pic: Ross Halfin/Imperial Press

TOUR EQUIPMENTS DATA

[Main Guitar] PAUL REED SMITH(1990~1993)
Pickups: ARTIST SERIES TREBLE and
ARTISTS SERIES BASS HUMBUCKERS
Fingerboard: ROSEWOOD
[Other Guitars] GIBSON SG DOUBLE NECK(1977)
GIBSON LES PAUL STANDARD
OVATION 12 STRINGS
OVATION NYLON STRINGS
OVATION 1985 COLLECTOR MODEL
[Effects] DIGITECH-TSR 24-MULTIPROCESSOR(2台)
DIGITECH-DHP 55-HARMONIZER(2台)
TC ELECTRONICS 2290 DELAY(2台)
TC ELECTRONICS 1210 SPECIAL EXPANDER
[AMP/CABINET] MARSHALL
*これはアレックスのギター・テクが答えてくれたアンケートに基づくものです。

A: ポールとは何度か一緒にプレイしたこともあるんだけど、彼はとっても熟達したギタリストで、いい先生でもあるし、素晴らしいユーモアのセンスの持ち主だよ。彼はとても速く弾けるし、とにかくテクニカルで器用な人だ。ただスティヴ・ヴァイとかサトリアーニとかに対しても僕は同じような感じを持っていて、ポールは僕自身が興味を覚えたり、その一部として関わっていたりという時代のギタリストではないと思うんだ。

Q: ジョン・ペトルーシはどうですか?

A: ドリーム・シアターの? 実はあんまりよくは知らないんだ。

Q: クリス・デガモとマイケル・ウィルトン(クイーンズライチ)。

A: あの2人は素晴らしいコンビだと思う。『EMPIRE』は凄い音作りをしてるアルバムだったよ。あのアルバムでのギターは、はまるべきところにピッタリとはまっている。彼らの場合、互いの引き加減がとても巧く出来ていると思うんだ。それはとても難しいことなんだよね。ギタリストっていうのは、だいたい自分のアイディアが一番だと思うものだから、2人一緒となると調和を取るのとはとても大変なんだ。でも彼らは巧くやっていると思う。

Q: では、ラッシュのアレックス・ライフソンという人について。

A: う〜ん(笑)。……あいつも演奏はだいたい円熟してきたかな。初めはあの世代の多くのギタリストのように出来るだけ速く弾こうとしていたけれど、バンドの中でのギター・プレイには、他にもっと大切なこともあるんだということを彼は学んだんだ。特に3ピース・バンドではね。どうやってサウンドを埋めるか、自分の弾くコードでどうやったらもっと深みのある音になるか、とか…。そうやって彼は上達してきたけれど、もっと時間を掛けて、もう少し熱心に練習すれば、もっと巧くなれるんだろう。

でも、人生の中で他にももう少し大切なものがあるという見方をすると来ているんじゃないかと思う。それでも彼は充実してるよ。僕は彼のことをよく知ってるんだけどね(笑)。プレイすることを楽しんでるし、楽器が好きなんだ。

Q: 彼は家でもよく練習するのですか?

A: あまりしないね。もちろんツアーの前はやっているけど。リハーサルの始まる前の1ヵ月間は、1日3〜5時間はやってるよ。だけど、ツアーに出ていない時の彼は、そこからまったく離れて、焦点を他に移す。ツアーに出たりスタジオに入ったりしていると、人生の毎日、そればかりになってしまうから、それが終わるとスーツケースの荷造りを始めなくなる。引き出しに服をしまっ、ギターもしまっ、弾きたい時だけ弾けるようにするんだ。でもオフの時もギターを弾いてはいるよ、ツアーが終わってだいたい経ってからね。そういう時は自分の楽しみのためだけに弾くんだよ。

Q: 最後に、日本のギター・キッズに一言。

A: とにかくたくさん練習すること。僕自身も、もっと練習しなきゃいけないんだけど。それが上手くなる唯一の方法だよ。練習して、よく聴いて、他の人と一緒に演奏して、心と耳をいつも開いておくことだね。

Q: 自分のやっていることが正しいかどうかは、どうやって知ることが出来るのですか?

A: それは出来ないよ。何か演ってみて、それが自分にはちゃんと良く聴こえていれば、きっとそれでいいんだ。正しくは弾けていなくても、そんなのは構わない。楽器、特にギターは感情を吐き出すひとつの手段なんだよ。もし、嬉しいとか悲しいとか、様々な感情を楽器に奏でさせることが出来たら、それでいいんだ。